

くなくなった。(7)家系調査法では世代を重ねるに従って才能の顕著なる向上が音楽的優秀家系に示された。ここで素質と環境との相乗的効果が如実に示されたようである。(8)高度の音痴の兄弟について学習を試みた結果は、学習効果が素質のみならず動機付けにも大いに関係することが示された。(9)小・中・高校生四〇四名に対してシューア・テストを試み、分散分析を行なった結果は、音色判断以外は性差がなかった。ここに女兒が一般に音楽がよくできるという考えや現実はその通りであったりすることに對しては、何らかの教育的配慮が必要であると思われる。(10)同上調査において小学生と中学生との間には音楽的才能の発達上から一つの明確な一線が引かれる。音色判断は発達の傾向が不明瞭であるが、長短・音記憶判断また特に強弱判断は発達の傾向が明確であり、高低判断はその中間に位置する。これにより音楽的才能の発達には、一般には飛躍点があることが知られた。(11)日本人は米国人に比し、長短判断は一般に優位、リズム判断は小学生のみ優位であるがそれ以上の年齢水準では劣位、強弱・記憶・高低はこの順に劣り、音色はかなり劣る。近時我が国の音楽教育特にリズム教育がその困難にもかかわらず、幼稚園を筆頭に普及徹底した結果と思われる。(大会発表論文抄録84—85頁)

## 動きのリズムの評価に

### 関する一研究

(幼稚園児を対象として)

大阪・菅南幼稚園 橋 本 暢 子  
大阪市立大学 山 松 質 文

序説 リズム指導の要諦は、表面的なりズム運動自体を直接扱うことよりは、むしろ幼児との人格のふれ合いから、保育者のあたたかい心と鋭い洞察によって幼児の生活そのものをまず受け入れてやることからはじまるともいえよう。

また下記の動きのリズムの評価をはじめ諸検査並に評価を通じて、人格形成との連関のもとに、保育上の障害の発見とその除去から更に保育効果の促進へと向かわねばならぬと考える。このため、動きのリズムの評価の妥当性と信頼度をたしかめる必要があるのである。

さて米国の音楽教育家ムアセル (Muesel) によれば、リズムは表現的な身体運動である。従ってリズムの本質がその表現にあるのであるから、必ずしもそのリズムミカルな刺激は外部から来るものだけに限らない。例えば、音楽刺激を伴わなくても心の中のもの、希望・興奮がそのまま動きとなって現れてくればよく、従って音楽のリズムはむしろその特殊化したものといえよう。またトリス (Tolls) によると、子どもは音よりもリズムの方に心がひかれるといわれるが、幼児のリズム指導は「動きのリズム」を主体としてそれと結びつけたある時は平行して、歌唱、演奏にみられるような狭義の音楽のリズムの指導をすべきであり、リズムは運動、なるべくは、全身運動によって大きな動きを筋肉の中に感じるのがよく、従って幼児の指導には特に動きのリズムに重点をおいて行なうべきであると思われる。

リズム指導にあたっては、準備的指導を経ないで直ちにそれに入るのが自然なやり方であろう。例えば、速度感・メトロノームの能力のみで、リズム感を評定してはならぬと思う。

対象 H幼稚園の保育時間を借りて数か月指導することにより、

園児の動きのリズム体験をとらえた。観察の徹底を期するため、対象人数を制限して、一年保育児六才一六才三か月の女児一〇名とした。

**手続** リズム指導期間の直前・直後に田研式音楽素質診断検査(リズム・テストのみ)、大阪市大山松式リズム形態記憶(再生)検査、労研狩野式運動能発達検査、山松案「基礎的動きのリズムの評価」を施行し、それらと山松案「指導過程での動きのリズムの評価」との列位相関をもとめ妥当性をみ、更に各検査ごとに指導期間の直前と直後の相関を求め、信頼度をみた。

「指導過程中の動きのリズム」の評価の判定のため、動きの正確度と表現の豊かさにより五段階の評価基準を設けた。また「基礎的動きのリズムの評価」基準として、特定の曲によるスキップおよびマーチの三様のテンポの変化に合せて全く自由にスキップまたは歩行させ、リズムに乗る程度および表情などを観察し、三段階の評価をつけた。なお後者の評価の客観性をたしかめるため、評価者二人の相関を平均順位相関によって求めたところ、一回目は〇・九四一、二回目は〇・八二三であった。各相関係数の算出はスピアマンの列位差法によった。なお以上の諸検定はノンパラメトリック法によった。

**結果** 以上要するに「動きのリズム」の評価の簡便法として考案した「基準的な動きのリズムの評価法」は妥当性はあるが信頼度が比較的に低く、運動能検査は妥当性・信頼度共にまず申し分なく、「動きのリズムの評価」の代用としては一応役立つであろうと思われる。リズム形態再生テストは妥当性にやや難色があり、音楽素質診断テストは妥当性・信頼度共に問題がある。なお「リズム指導過程での評価」と知能との相関は余り高くなく、阪大荻原式の体部比例指数による身体均斉度との相関は殆んどみられなかった。

今後は「動きのリズムの評価法」の再検討、無作為抽出法の適

用、被験者の増大、対象群の設定、双生児法の併用等により、更に本研究を発展させたいと思う。  
(大会発表論文抄録83-84頁)

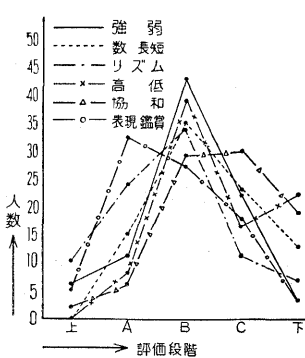
## 幼児の音楽的感受性測定と 旋律楽器の指導について

(田中音楽素質診断テストにより)

広島市吉島幼稚園 松田美枝子

私達は毎日の保育の中で、うたわせたり、リズム遊びやリズム合奏または自由表現、レコード鑑賞といういろいろな角度より音楽教育をしているが、一年二年の間に子ども達がどの程度音楽を理解し、音を正しく受入れることが出来ているのか知りたいと前から思っていた。しかしその測定法はなかなかむずかしいので、このたびは田中音楽素質診断テストにより(レコード使用)感受性の測定をし、全体の程度をしり今後の指導のでがかりにしたいと考えた。テストの内容は①強弱判断、②長、

音楽テスト六項目の比較



長短判断、③リズム判断、高低弁別、⑤協和判断、⑥表現鑑賞の六項目となっており、この六項目の得点を上、A、B、C、下の五段階の評価に分け比較してみると図表に示す通り、全体的にリズム判断表現鑑賞、強弱判断の項目は、よく出